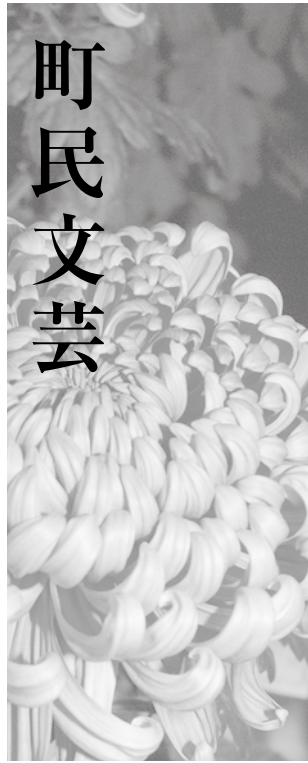


町民文芸



只見短歌会

九月詠草

大塚栄一 指導

暑さ続く街のマネキン人形は早くも秋の装ひをなす
古川 英子

若きらが一週間ほど出掛けるに留守あづかれぬ老の身思ふ
吉津 政枝

床下に流木の炭敷き詰めて茶の間の畳の表替へする
皆川 恒子

車椅子の人や立ちゐる人もあり大きボールを苑で投げ合ふ
五十嵐 英子

家裏まで下り来し猿ら追はれば南瓜抱へて逃げ行きしとふ
渡部 ゆき子

稲架結ふに少し早目の畑作を除きて畝の地均しをしぬ
目黒 富子

朝ごとに胸張り新聞配りゆかむ背をまろめれば老いしるく見ゆ
五十嵐 夏美

稲刈りを目前にして彼岸入りの強き雨降り稲倒しゆく
馬場 八智

また一戸老いて離農をせしと言ふ若きらに従ふ老の心は
齊藤 ちひろ

小学生の鼓笛パレード秋晴れの町に響きて無事故を願ふ
渡部 ヨリ子

孫植ゑし軒の蔓薔薇この夏は窓まで伸びて花咲き揺るる
新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

十月例会

目黒十一 指導

秋の川兵士送りし橋に佇つ
空き畑南瓜のつるのはい廻り
礼

湯屋までの右も左も蕎麦の花
秋晴れや林の奥の物暗く
洋子

塗師描く蜻蛉只今とまりたる
ゆさゆさと茅刈る土手に影長し
敦子

雨の中花こぼさずに花魁草
焦げ目つく芋の味噌煮を箸で追い
礼

身に入むやみな尖がって沢の石
いわし雲電波をつなぐ塔の建ち
修一

おかめして踊る御爺や敬老会
真白な絹雲流れ彼岸花
一灯

秋明菊白きを活けて六畳間
艶のよき小粋な茄子を丸漬けに
一灯

振り仰ぐ原爆ドーム透けて秋
水流る洞の時空や秋高し
恒夫

蒼天や遠目にも知る熊の架
園児たち草野に秋の遊びかな
吉児

運動会町内対抗リレー湧き
和太鼓の響きは空に秋まつり
邦男

只見ダム白く光りて秋の雷
鈴虫や古民家の窓夕迫る
隆堂

芋の秋錆びたことなき父の鍬
隣田の案山子頼りに晴れつづき
邦夫

いつの間に長湯となりし秋の雨
コスモスや久しき友の訪ね来て
康女

不自由を自由に看護秋日和
菜を刻み夕餉の支度ちちろかな
又壺歩